



# 21世紀の森と広場よもやま話～おもしろ公園セルフガイド～



## ①水とこかげの広場

当初、「近未来シーン」をイメージして光を反射する鏡のような光沢のあるモニュメントを設置して未来を感じさせる絵が提案されましたが、実際にここに立って何が相応しいのか検討を重ねた結果、光と風の広場から流れ来るせせらぎが広場の橋の下を過ぎて下流部の川原の風景につながるというイメージの絵がこの千駄堀の谷津の景観に一番マッチするという事で石を敷き詰めたデザインの設計になりました。

この雄大な川原をイメージしたデザインを橋の上から見てもらおうと、よくお分かりいただけると思います。広場の橋を通りかかった時には、一度眺めてください。



## ②みどりの里～田園風景の再現～

農家住宅に面している区域なので、水田・畑・果樹園などを配置し昔懐かしい農村風景を再現しています。農家住宅が並ぶ集落の東側に位置していることから、千駄堀字「東（ひがし）」と言います。当初の園路設計案は池の真ん中に立ち上がる噴水を園路からの視線を受け止めるアイ・ストップとし、ビスタ（見通し線）を通すために真っすぐな園路を考えていました。しかし昔の千駄堀を再現するのに幹線道路のような直線園路は馴染まないのが水路に沿って蛇行する園路にしました。



## ③森のプロローグ（地下連絡通路）

当初は歩行者デッキを架ける計画でしたが、景観的に目立つし、入口から下の広場までのスロープが急勾配となり、車椅子は別ルートを通らなければならない状況でした。そこで入口広場を掘り下げて四角形の広場に、トンネルを掘る案に変更しました。地下道の暗いイメージではなく、細長い広場として「明るく、楽しく、快適に」をコンセプトに作られました。

## ④千駄堀池（池の水源は斜面の下からの湧き水）

千駄堀字「太田（ダイタ）」とって以前は腰まで深く浸かって田植えを行なったそうです。

①千駄堀池の建設では予定地が水をたっぷり含んだヘドロ状の土だったので「圧密沈下」を利用した工法を採用しました。土を盛って圧密をかけると重さによって地盤が下がり、盛った土を取り除くと池が出来上がります。盛った土は広場に転用できました。

産業廃棄物扱いになる腐植土を外部に持ち出さないで環境にやさしい池造成工法です。

②池に並んでいる木杭は何のため？

計画当初は人間主体のポート池と生きもの主体の水鳥の池に分けるために木杭を設置しましたが、開園前に水を貯めると、カイツブリがヨシやマコモで浮き巣をつくりヒナを育てました。水鳥の生育環境を壊してまでポートをやるべきではないと考えポート導入はやめました。



## ⑤広場の橋

公園の中に道路を通す計画を道路部門でつくる時に、当時の橋は画一的で景観的によしくないものができるかと予想していたので樹木で橋をできるだけ隠すことを検討していましたが、学識経験者の検討会のご努力により予想に反してアーチ橋となり、美しい橋となったので、公園側としても、逆に橋の手前には木を植えないようにし、両サイドにカツラの木を配置するだけに抑えて、橋をしっかり見せる設計に変更しました。広場の橋と森の橋は平成元年度の土木学会で美しい橋に与えられる「田中賞」を小さな橋の部門で受賞しました。その年に大きな橋の部門では横浜のベイブリッジが同時受賞されています。

